高校生 大学で実験学ぶ

猶興館高 遺伝子操作に挑戦

遺伝子操作の実験に挑戦する生徒ら

平戸市の猶興館高理数科の2年生約40人が17日、佐世保市の長崎国際大で、オワンクラゲの緑色蛍光たんぱく質（GFP）を使った遺伝子操作実験に挑戦した。

本格的な実験を経験することで、生徒たちに学習意欲を高めてもらおうと、同高が大学側に協力を申し入れて実現した。

生徒らは小型チューブなどを使い、GFPと遺伝子を運ぶDNAを連結させたうえで大腸菌と混ぜ合わせた液体を、大腸菌の栄養分になる寒天の上に薄く広げた。この作業で大腸菌の中にGFPを取り込むことができれば、大腸菌の増殖とともにGFPも増えるといい、29日に紫外線を当てて、寒天上が緑色に光るかどうかを確かめる。

18日はマウスに精神安定剤などを投与し、薬が生物に及ぼす影響について学ぶ予定。薬剤開発の仕事に就きたいという松本祥希さん(16)は「細かな作業の連続だが、貴重な体験ができて面白い」と笑顔で話した。

読売新聞、H23.8.18（木）